

嶋田智明, 大峯三郎(常任編集)/
立花 孝(ゲスト編集)

「実践 MOOK 理学療法プラクティス 肩関節運動機能障害 何を考え、どう対処するか」

神先秀人

(山形県立保健医療大学保健医療学部理学療法学科)

肩の痛みや可動域制限は理学療法士が臨床場面でしばしば直面する。それにもかかわらず、肩の障害に対してあまり深く関わった気にならないのは、その病態の複雑さゆえに、理解することをあきらめて、関節拘縮には関節可動域運動、痛みには温熱療法と言った短絡した治療パターン、もしくは疾患または手術に伴う定型的プログラムの実行にとどまっていたからではないか。そして、十分な改善が認められない場合には、「治療の限界」とあきらめ、制限された機能の中でのADLの指導に終始していたのではないか。自らの過去を振り返ってそんな反省をさせられた。

複雑な身体運動の解明にこだわる姿勢、機能改善にこだわる姿勢がなければ、理学療法は発展しない。それ以上に重要なことは、われわれが「限界」とさじを投げ出すことで、患者の改善の可能性を閉ざしてしまいかねないことである。

著名な執筆陣により最先端の知識と技術をわかりやすく、丁寧にまとめられた本書は、肩関節の機能障害に対する新たな視点を明確に提示してくれる。

本書は、「パート1：肩関節に運動機能障害を有する患者を受け持ったらどうするか」、「パート2：ICFからみた理学療法介入のポイント」、「パート3：機能障害と病態の関連性を理解する」の3つのパートで構成

されている。

まず、最初にパート1では、実際の臨床場面での評価からプログラムの立案までの流れを、病歴のとりかたや問診のポイント、臨床推論の方法を交えて、具体的に示してくれる。パート2においては、痛みや拘縮、不安定性、筋力低下といった機能障害に対する治療の根拠と介入方法、さらには日常生活における工夫や指導方法が、多くの図や写真を用いてわかりやすく解説されている。そしてパート3では、肩関節周囲炎、腱板断裂、腱板疎部損傷、肩関節脱臼、肩関節不安定症、肩鎖関節炎・脱臼、肩こり、肩のスポーツ障害などの臨床で直面する機会の多い疾患を取り上げ、その病態を、簡潔にまとめた多くのミニレクチャーを交えて解説し、機能障害と病態の関連性をより深く理解させてくれる。

新人理学療法士のみならず、現在の治療法に限界を感じている中堅の理学療法士にとっても、本書は多くのことを教えてくれる。肩の障害に限らず、局所の問題は、隣接関節のみではなく、遠く離れた部位にも何らかの影響を及ぼすことは明らかである。したがって、治療に当たっては、全身への視点が欠かせない。本書には、その具体的な臨床推論の方法や治療の展開方法が、全身の中で最も複雑な運動形態を示す肩関節において示されている。さらに、その方法が、単に理屈だけでなく、鋭い観察力と洞察力を有する執筆陣の豊富な臨床経験に基づいて、具体的に、そして明解に示されている。

本書を読まれた臨床家の多くは、これまでのおぼろげにしてきた疑問が一つひとつひも解かれていくのを体験し、新たな挑戦への意欲が起ってくるに違いない。

●B5判 220頁 2色刷

定価 5,040円(本体 4,800円+税 5%)

2009年 文光堂・刊